

存在拘束性概念をめぐって

—Seinsgebundenheit と Seinsverbundenheit—

千 葉 芳 夫

Seinsgebundenheit および Seinsverbundenheit は、マンハイム知識社会学の中心的概念である。従来は、この二つの用語は同じ内容のものと考えられてきた。だが、最近になって、両語の意味の違いに着目する議論が現われてきている。本稿は、まずこうした議論を紹介、検討し、ついで筆者なりの解釈を提示しようとするものである。

1

筆者の知る限り、この問題に関する議論は、メーヤに始まる。彼によれば、Seinsverbundenheit は、論文「知識社会学」(1931)において初めて使用される語だとされる。そして、これは『イデオロギーとユートピア』(1929) (ここでは、Seinsgebundenheit が用いられている)に対する誤解に基づく批判へのマンハイムの対応を示すものである。すなわち、Seinsverbundenheit は、知識と社会的存在との関連が決定論的なものではないことを明確に表現するために用いられた語だとされる^①。

だが、シモンズも指摘するように、Seinsverbundenheit は、『イデオロギーとユートピア』の出版以前に発表された「精神的領域における競争の意義」^②においても用いられている。更にこの語は、1925年に教授資格論文として書かれた『保守主義』でも使用されている。(但し、出版は、メーヤの論文より後の1984年であるが。)つまり、Seinsverbundenheit が、『イデオロギーとユートピア』に対する、特に Seinsgebundenheit という語に対する、誤解を避けるために使われ始めた、というメーヤの説は、支持しえないのである。

ここで、他の論者の議論に立ち入るに先立って、知識社会学におけるマン

2 (千葉)

ハイム独特の用語の変化を一瞥しておきたい。

まず、「歴史主義」(1924)においては、Standortgebundenheit という用語が現われる。これは、思想的・精神的立場と認識の内容や視野との結びつきを意味する概念であり、この意味を保ったまま、以後、「知識社会学」に到るまで使用されている。だが、Standortgebundenheit は、知識と社会的存在との関連を意味するものではない。思想的・精神的立場が、主体の社会的位置と関連づけられることによって、知識社会学本来の問題が現われる。マンハイムは、「歴史主義」の後半部ですでにこの問題圏に足を踏み入れているが、この問題が主題的に採り上げられるのは、「知識社会学の問題」(1925)以降である。

「知識社会学の問題」では、Seinsgebundenheit という用語が、初めて用いられる。だが、Seinsgebundenheit は、同一頁の、しかも註の中で数度使用されるに留まっており、このことから判断すれば、ここではまださほど重要な意義を与えられていないと考えられる。この論文において、知識と社会的存在との関連を示す独自の用語として用いられているのは、むしろ Engagiertsein である。これは、知識内容を(特に経済的な)利害と直接に結びついたものとする俗流マルクス主義の見解を批判するために用いられた語であり、知識内容と思考主体とのより包括的で、かつ間接的な結びつきを意味するものとされている(SS. 377~378, 訳93~94頁)。しかし、Engagiertsein は、以後の論文では用いられることはない。

『保守主義』においては、「知識社会学とイデオロギー研究の中心的問題は、あらゆる思考と認識の Seinsgebundenheit である」(S. 47) と述べられていることから理解されるように、Seinsgebundenheit が、知識社会学の中心的概念として位置づけられている。この論文では、又、Seinsverbundenheit も用いられているが、しかし、どちらも一、二度である。「保守主義的思考」(1927)及び「世代の問題」(1928)においては、seinsgebunden 及び seinsverbunden という形容詞形が数例見られる程度である。

そして、『イデオロギーとユートピア』に到って、Seinsgebundenheit が、知識社会学の中心的概念という明確な位置づけをもって、しかもかなりの頻度で使用されるようになる。同年の「精神的領域における競争の意義」においては、Seinsgebundenheit と並んで Seinsverbundenheit も再び使用されている。(だが、どちらも一度ずつである。)[知識社会学]においては、

Seinsgebundenheit, Seinsverbundenheit が共に用いられるが、名詞形としても形容詞形としても、Seinsverbundenheit, seinsverbunden の方がはるかに多い。

つまり、Seinsgebundenheit にせよ、Seinsverbundenheit にせよ、それらが知識社会学の中心的な用語という意義づけを与えられ、又、ある程度の頻度で使用されるのは、『イデオロギーとユートピア』と「知識社会学」においてである。しかも、『イデオロギーとユートピア』においては、もっぱらSeinsgebundenheit が用いられているのに対して、「知識社会学」では、Seinsverbundenheit の方がはるかに多く用いられるようになっているのである。

さて、Seinsgebundenheit と Seinsverbundenheit とに最も明確な意味の区別を認めているのは、ローダーである^①。彼によれば、Seinsverbundenheit は、方法論的・分析的な概念であり、Seinsgebundenheit は認識論的（ローダーの用語法では総合的）概念である。すなわち、前者は世界観と具体的存在との関連を示す概念であるが、これに対して後者は、否定的な政治的用語であり、敵対者の世界観をイデオロギーだとする認識を意味している。こうして、Seinsgebundenheit は、相対性と物象化という否定されるべき意味を含むことになる。つまり、Seinsverbundenheit が価値中立的な分析的概念であるのに対して、Seinsgebundenheit は否定的・政治的な認識論的概念であるというのがローダーの解釈なのである。

このようなローダーの解釈について、次の事が検討されねばならない。

① Seinsgebundenheit は、否定的な政治的用語であるか。② Seinsverbundenheit が分析的概念であり、Seinsgebundenheit が認識論的概念であるという区別が、はたして妥当なものかどうか。

まず、①について。『イデオロギーとユートピア』において、マンハイムは、イデオロギーという語からも政治的意味合いを排除しようとしている。「知識社会学の立場からは、次の二つは、はっきり区別される。一つは一党派の精神的武器という意味で、イデオロギーと呼ぶ場合である。もう一つは、あらゆる生き生きとした思想の Seinsgebundenheit という普遍的正当性をもつテーゼに基づいて、イデオロギーといわれる場合である。」(S. 71; 訳189頁) 知識社会学において用いられるイデオロギー概念は、もちろん後者である。そして、マンハイムが、イデオロギーという語に代えて Seinsgebunden-

heit を用いるのは、イデオロギーという語に含まれる学問的内容を、より明瞭に表現するためである。このことから理解されるように、Seinsgebundenheit は、決して政治的用語ではない。更に、マンハイムは、Seinsgebundenheit の積極的な意義をも認めている。それは、一方では、部分性・一面性という認識の制約をもたらすものであるが、他方、「存在への根差し」を意味し、「特定の存在領域を把握するうえで、いっそう大きな力をもつチャンス」(I. u. U.; S. 73, 訳192頁)を意味している^⑤。Seinsgebundenheit を、もっぱら否定的な意味をもつものとする解釈は、このようなマンハイムの見解を無視したものと言わざるをえない。

次に②について。ここではまず、『イデオロギーとユートピア』における「没評価的イデオロギー概念」が想起されるべきであろう。「没評価的イデオロギー概念」とは、『『暴露の』意図を捨てて、社会的な存在状況と認識視角との間のつながりを究明する」(S. 71, 訳189頁)という研究の段階において現われるイデオロギーの概念である。この場合には、「人間の思想のイデオロギー性とは、……正しいとか虚偽であるとかいうこととかかわりなく、むしろ……思想のその都度の Seinsgebundenheit という性格を意味するにすぎない。」(SS. 72~73, 訳192頁)「没評価的」とは、認識論的な評価を行わない、という意味であり、ここでは、イデオロギー及び Seinsgebundenheit という語は、分析的(あるいは経験的)研究の領域に位置していることは明らかである。

もっとも、ローダーも指摘するように、全体として見れば、『イデオロギーとユートピア』においては、認識論的問題が中心に置かれていることは否定しえない。「没評価的イデオロギー概念」は、「評価的イデオロギー概念」に到る過程において現われるにすぎず、Seinsgebundenheit に関する経験的研究も、認識論的評価を行うための予備的作業だと考えられないこともない。しかし、「知識社会学」においては、経験的研究と認識論的研究の二部門が独立のものとして設定され、しかもどちらの部門においても、Seinsverbundenheit がより多く用いられている。特に、認識論の採りうる二つの道として、Seinsverbundenheit を止揚しえないものと考えられる方向と、Seinsverbundenheit を絶対化しない方向とが示されていることは、Seinsverbundenheit が認識論的領域においても用いられることを明示している。このように、Seinsverbundenheit が分析的概念であり、Seinsgebundenheit が認識論的

概念である、という区別もまた、受け容れることのできないものである。

次に、ケッター、メーヤ、ステアによる議論に移ろう。彼等は次のような二つの区別を提示している。

① *Seinsgebundenheit* は、思想が存在する条件と思想の構造との客観的で比較的厳密な結びつきを意味する。これに対して *Seinsverbundenheit* が意味するのは、思想の担い手の主観的関与と同一化の関数として捉えられる、それほど固定的ではない結びつきである。

② *Seinsgebundenheit* は、*Seinsverbundenheit* として捉えられる関連の物象化された形態であり、より拘束的な結びつきを意味している。

まず、第二の区別の根拠とされ、マンハイム自身が両概念の意味の区別を明示したと解釈されている、「知識社会学」の箇所を検討してみよう。そこでは次のように述べられている。

「知識社会学の探求衝動は、*Seinsverbundenheit* の絶対化へと導くのではなく、まさしく、現存の諸見解の *Seinsverbundenheit* を見出すことのうちに、*Seinsgebundenheit* からの解放の第一歩が見られる、という方向に導びかれることができる。」(S. 674, なお、強調はマンハイムのもの)

確かに、ここでは二つの概念は明確に区別されているようにみえる。*Seinsverbundenheit* が価値中立的な概念であるのに対して、*Seinsgebundenheit* は克服されるべきものである、というニュアンスを我々は読み取ることができる。だが、*Seinsverbundenheit* の事実を知ることによって、*Seinsgebundenheit* からの解放の第一歩を見出すとは、知識と社会的存在との関連を知ることによって、——このことを反省的契機として——視野の部分性を克服することだ、と単純に解釈することもできる。少なくとも、この論述から、*Seinsgebundenheit* が *Seinsverbundenheit* の物象化された形態だという解釈を引き出すことは困難である。

更に、後に出版された『イデオロギーとユートピア』の英語版の序文にも、これと同じ内容の箇所があるが、そこでは次のように述べられている。「……*social determination*^⑧ からの相対的な解放の機会は、この *determination* への洞察に比例して増大する。」(p. 43, 訳151頁) ここでは、先の引用文における *Seinsverbundenheit* と *Seinsgebundenheit* に当る区別はみられない。この区別が重要な意義をもつものだとすれば、——その間にマンハイムの考えに変化が起こったのではない限り——英語であっても、異なった語が用い

られたはずであろう。このように考えるなら、「知識社会学」においても、明確な意味の違いがあるかどうかは、疑わしいものとなる。

また仮に、先の引用箇所における両語の意味の違いを認めるにしても、そこで示されている意味の区別は、その箇所においてのみ、みられるものすぎない。例えば、「知識社会学」には、次のような表現も見られる。「マルクス主義は、人間の思考一般の Seinsgebundenheit という知識社会学的な基本的見解を、本来はずっと以前に、このようなより原理的な形態で定式化しえたはずだ、と我々は考える……。」(S. 644, 訳312頁) みられるように、ここでは Seinsgebundenheit は、知識社会学の基本的見解とされており、先の箇所にみられるような否定的なニュアンスは、なんら含まれていない。だから、仮に前述の引用箇所においてマンハイムが Seinsgebundenheit と Seinsverbundenheit とを区別しているとしても、この区別は、「知識社会学」においても一貫して当てはまるものではないのである。このように、ケッター等の第二の区別は、二つの概念の一般的な意味の相違を示すものとは考えられない。

次に第一の区別に移ろう。これは、第二のもののように明確な根拠に基づいた区別ではない。またそれは、客観的で因果決定論に近い固定的な関連と、主観的要素を強調するそれ程固定的でない関連という、いささか漠然とした区別である。

マンハイムが知識と社会的存在との関連をどのようなものと考えていたかについては、様々な解釈がなされている^⑧。だが——まさに多様な解釈が成り立つということ自体が示しているように——この関連は、一義的に明確な形では説明されていない。というよりむしろ、この関連を解明することは、知識社会学の課題とされ、様々な角度からの試論的な説明が提示されるに留まっているのである。そして、いずれにせよ、ケッター等が示しているような異なった二つの関連が明確に区別され、一方が Seinsgebundenheit、他方が Seinsverbundenheit という語で表現されているのだ、と解釈しうる根拠は見出せない。彼等自身、二つの区別を示した後に、次のように述べて、結局はこのことを認めている。すなわち、これらの二つの用語は、通常は非常に近い意味をもつ語である。それは、思考主体の社会的性質と思想の特性との結びつきを意味するものであるが、その関連がどのようなものかは、特定化されていないと。

以上の検討から明らかなように、Seinsgebundenheit と Seinsverbundenheit とに明瞭な概念的区別があるとは、判断しえない^⑩。我々は、せいぜい二つの語の一般的なニュアンスの差を見出しうるにすぎない。シモンズも述べているように、Seinsgebundenheit は Seinsverbundenheit よりも決定論的ニュアンスが強い。ローダーにせよ、ケットラー等にせよ、彼等の解釈は、具体的な使用例に基づいた概念的 content の解釈であるよりも、このニュアンスの違いに基づくものであるように思われる。しかも、このニュアンスの差にしても、マンハイムがそれをはっきりと意識して、意図的に二つの語を使い分けているとは考えられないのである。

だが、このニュアンスの違いが、さしあたっての手懸かりを与えてくれる。前に述べたように、『イデオロギーとユートピア』から「知識社会学」にかけて、全体的傾向としてみれば、Seinsgebundenheit から Seinsverbundenheit へという用語の変化がみられる。マンハイムが、決定論的なニュアンスの弱い Seinsverbundenheit をより多く用いるようになったことは、彼の立場のなんらかの変化に対応しているのではないか。すなわち、Seinsgebundenheit から Seinsverbundenheit への用語の変化に、彼の思想的立場の変化が表現されているのではないか。両語の意味の違いについての問いは、このような間接的な形で提起されることによって、初めて答えるものとなるのである。

2

『イデオロギーとユートピア』から「知識社会学」への変化を捉えようとする場合、目につくのは、認識論的立場の変化である。マンハイムの場合、認識論の問題は、相対主義の克服という、歴史主義に由来する課題を中心に展開されている。歴史主義は、真理と価値の歴史的变化を認めることによって相対主義に陥ることになる、との批判を受けてきた。マンハイムの知識社会学においては、一つの社会内部においても、認識や思想が主体の社会的位置に応じて異なるということが認められることによって、その上にもう一つの難問が加わる。すなわち、歴史的相対性の問題の上に、いわば集団的相対性の問題がつけ加えられるのである。認識論的側面からみれば、マンハイムの知識社会学の展開は、この二重の相対性を克服しようとする試みとして現われる。

この問題の解決の方向が、明確な形で示されるのは、まず『イギオロギーとユートピア』においてである。マンハイムは、歴史的・社会的知識の存在拘束性は事実として認められねばならないと主張し、その上で採りうる認識論の方向として、次の三つのものを挙げている(SS. 163~165, 訳303~306頁)。

第一は、存在拘束的な認識の真理性を完全に否定する行き方である。第二は、歴史的・社会的知識の社会的偏差を摘出し、それを排除することによって、客観的な——没評価的・超歴史的・超社会的な——知識を獲得しようとする道である。第三は、「そのときどきに可能な、もっとも包括的、もっとも前進的な立場から、そのときどきの総合的展望と総合とをはかろうとする」(S. 165, 訳305頁) 行き方、つまり「動的総合」の立場である。

第一の道は、マンハイムにとってはむしろ否定されるべき立場である。この道は、超歴史的・絶対的真理を前提し、歴史的に、あるいは立場によって変化する認識の真理性を認めようとししない。歴史主義が相対主義だという批判も、このような立場からなされるのである。だが、マンハイムによれば、このような真理概念が妥当性をもつのは、自然科学の領域においてのみである。歴史や社会の認識は、本質的に、時代や立場によって異なるものであり、この領域で妥当性をもつ真理概念は、このことを積極的に認めるものでなければならない。つまり彼は、真理概念の転換こそが必要だと考えるのである。そして、超歴史的・絶対的真理に代えて、動的真理という概念が提起される。こうした考えに立てば、相対主義だという批判は、不適切な真理概念を前提した批判であり、それ故、意味をなさないことになる。歴史的・社会的知識は、本質的に存在拘束的なものであるが、動的な真理概念を前提とすれば、このことは決して相対主義を意味するものではない。マンハイムは、このような彼の立場を「相関主義」(Relationismus)と名付け、超歴史的・絶対的真理を前提する立場との対決の姿勢を明瞭に示している。

第一の道が存在拘束性の認識論的意義を全く認めないのに対して、第二の道は、消極的な形においてではあるが、それを認めている。この道は、歴史的・社会的知識のうちから世界観的・評価的要素と分離しうる領域を取り出し、この領域を社会科学の領域として確保しようとする。つまり、存在拘束的な知識のもつ社会的偏差を矯正することによって、普遍的な知識を獲得しようとするのである。これは、形式社会学やM・ウェーバーにみられる立場である。

マンハイムは、第二の道を可能な道として認めてはいる。だが、知識社会学本来の道は第三のものだとする。それは、歴史的・社会的知識の大部分が、しかも本質的な部分が、評価的・意志的要素とは分離しえないと考えられるからである。ここでは、存在拘束性の認識論的含意が、認識の意志的要素との結合として、更に、このことから生じる認識の部分性・一面性として捉えられる。第三の道は、歴史的・社会的知識のこのような性質を本来的なものと認めた上で、その部分性の克服の方向を模索するものであり、具体的にはこれは、「社会的に浮動する知識人」による「動的綜合」という周知の立場である。

この綜合は、政治的意志と結びついた様々な党派の見解を、その内容だけでなく、思想基盤から綜合しようとするものである。このような綜合が可能になるのは、党派の視野が、「生成する全体性の要素として組み立てられて」(S. 132, 訳266頁)いる、「この全体のなかで、その都度補足しあう部分的見解」(S. 129, 訳263頁)だからである。また、これが「動的」と呼ばれるのは、それが時代を超えた絶対的な綜合ではなく、それぞれの時代において達成されるべき——つまり、時代と共に変化する——綜合だからである。こうして、「動的綜合」は、「時代のなかでおよそ到達可能な、もっとも包括的な全体に対する視野を提供する」(S. 132, 訳207頁)という課題を果すことになる。このように、たとえそれがある時代においてのみ通用するものとしても、その限りでは、この綜合によって、認識の部分性・一面性は克服されるのである。

「知識社会学」においても、存在拘束性の事実を認めた上で認識論が採りうる二つの道が示されている(SS. 674~675, 訳343—347頁)。

第一の道は、存在拘束性を止揚しえないものとし、視野の部分性に固執する立場である。この立場においても、異なった視座構造を相互に交換、翻訳する方式を見出すという回り道を通して、客観性が保証されると考えられている。つまりこの立場では、客観的ではあっても部分的な、複数の視野の存在が容認されるのである。そして、これらの視野のうちで、どれが対象についての最大の把握力をもつか、すなわち、対象の決定的な諸連関を認知可能にするかが問われることになる。

第二の道は、Seinsverbundenheit を絶対化せず、Seinsverbundenheit の事実を知ることのうちに、Seinsgebundenheit からの解放の第一歩を見出す、

という立場である。ここではまず、存在拘束的な視野の部分性の自覚によって、視野が中和化される——つまり、その視野から絶対性という性格が取り去られる。ついで、抽象化と形式化を通してより包括的な視野が作り出されることによって、認識の部分性が克服されるのである。

第一の道は、『イデオロギーとユートピア』の第三の道からかなり後退しているという印象を与える。なによりそれは、視野の部分性の克服という、相対主義の克服にとっては死活問題とも思われる試みを放棄しているからである。マンハイムは、「知識社会学」における二つの道のどちらが選ばれるべきかは決定しえない、としているが、このことを考えあわせれば、彼が第二の道により大きな可能性を認めているのだと判断しても、的はずれではあるまい。だが、この第二の道も、『イデオロギーとユートピア』の第三の道とは異なっている。まず、存在拘束性からの解放の可能性をはっきり認めるといふ点において。また、より包括的な視野を目指すという点では同じであるが、抽象化と形式化を通してそれに到達しようとする点において。抽象化と形式化は、『イデオロギーとユートピア』においては、本来の道とは考えられていない、第二の道の特徴である。我々は、これらの点において、マンハイムの認識論的立場の変化をうかがうことができる。

Seinsgebundenheit から Seinsverbundenheit への用語の変化と関連して注目すべきは、「知識社会学」の第二の道と『イデオロギーとユートピア』の第三の道との間にみられる相違である。

まず、「知識社会学」においては、一つの方向としてではあれ、存在拘束性からの解放の可能性がはっきりと認められている。これに対して、『イデオロギーとユートピア』では、存在拘束性の克服し難さが強調される傾向がみられる。「多かれ少なかれ明確な階級的地位に立つ階層にとっては、政治的決定は、すでにあらかじめ与えられている。」(I. u. U.; S. 140, 訳276頁)

「……教養を媒介として全体と結びつくことなく、直接に社会的な生産過程にたずさわっている人間は、ただ限られた生活圏の世界観だけを受け容れ、もっぱら自分の特定の社会的位置による決定に従って行動する傾向をもつ。」(I. u. U.; S. 136, 訳271頁) もっとも、知識人だけは、例外的に特権的な地位を与えられている。知識人層の場合には、「選択の余地ははるかに広く、それに応じて全体への方向付けと総合的視野とが要求される。」(I. u. U.; S. 140, 訳276頁) このことは、『イデオロギーとユートピア』においても、知識人層

に限っては、存在拘束性からの解放の可能性が認められている、ということの意味するものであろうか。

マンハイムは、現代における知識人層の特性について次のように述べている。「現代世界の根本的傾向の一つが、あらゆる階級のうちに次第に階級の意識がめざめてくる点にあるとすれば、知識人という社会層もまた、階級意識とはいえないにしろ、自分の地位とそこから生じる様々の可能性や課題についての明確な意識をもつようになることは、また時勢の必然であろう。」(I. u. U.; SS. 139~140, 訳276頁) 知識人が全体への方向付けと総合的視野とをもちうることは、彼が置かれている社会的立場の故だとされている。ここでは、階級による拘束性とそれとは異なった拘束性という、存在拘束性の区別がひそかに導入されていると考えられる。階級による拘束性は強固なものであり、それ故、階級の視野の部分性は克服しえない。これに対して知識人層は、視野の部分性を克服し、総合的視野をもつことができるが、これは、彼等の知識人層という存在様式への根差しとそこから生じる「総合への意志」によって可能になるのである。とすれば、知識人層には、知識人層という存在様式のもつ存在拘束性の故に、視野の部分性の克服が可能になるという、逆説的な地位が与えられているのだ、と解釈しうる。このように、『イデオロギーとユートピア』においては、知識人層に関しても存在拘束性からの解放の可能性は認められていないのである。

次に、「知識社会学」においては、抽象的・形式的知識のもつ積極的な意義が認められるようになっていく。このことと存在拘束性からの解放の可能性が認められるようになったこととの間には、ある関連が認められる。

存在拘束性概念には、明瞭に区別しうる二つの契機が含まれている。一つは存在への根差しであり、もう一つは存在による制約である。後者は、認識の部分性・一面性という否定的な契機である。これに対して前者は、社会的立場から生じる意志と認識との結合を意味する。これは、歴史的・社会的現実の具体的な認識を可能とする積極的な契機である。「認識と意志とはなく、認識そのもののうちの意志が、特定の領域において世界の質的に充実した内容を解明する。」(Wis.; S. 672, 訳338頁) 『イデオロギーとユートピア』における「動的総合」は、これら二つの契機の不安定な均衡の上に成り立っている。しかし、「知識社会学」においては、マンハイムは、存在への根差しという契機を保ったままでは視野の部分性は克服しえない、とする立場に到

っているように思われる。「知識社会学」の第一の道では、具体的認識への固執という点において、なお存在への根差しという契機は保たれている。だがそこでは、視野の部分性は、克服しえないものとされている。これに対して第二の道においては、視野の部分性の克服は可能となる。だがそれは、「動的総合」における全体性の具体的な把握とは異なり、抽象的・形式的概念を基礎とした、単なるより広い視野の獲得に留まっている。またそこでは、この認識の担い手も、意志要因も、もはや問題とされてはいない。つまり、より包括的な視野の獲得——部分性の克服——は、存在への根差しというもう一つの契機の欠落によって可能となっているのであり、それ故、その認識は抽象的・形式的なものとならざるをえないのである。存在への根差しという積極的な契機から解放されることは困難であろう。だが、存在拘束性概念からこの契機が見失なわれ、それが視野の部分性という契機のみを意味するのであれば、存在拘束性からの解放について語ることは容易となる。

存在拘束性からの解放の可能性を認めることは、存在拘束性が固定的・決定論的な関連とは捉えられないことを意味する。このような関連を表現する語としては、Seinsverbundenheitの方がより適切であろう。もっとも、「知識社会学」においてさえ、二つの用語が区別し難い意味で用いられていることは、マンハイムの用語の選択が自覚的になされたものではないことを示している。すなわち、SeinsgebundenheitからSeinsverbundenheitへという用語の変化は、直接には、『イギオロジーとユートピア』においては認められていなかった、存在拘束性からの解放の可能性が、「知識社会学」においては、明確に認められるようになったことの無意識的な表現なのである。

このような変化の背後には、マンハイムの更に基本的な立場の変化がひそんでいる。「知識社会学」においては、具体性・個別性への志向が薄れ、また全体性への志向はほぼ完全に失なわれている。このことは、マンハイムが歴史主義の立場から大きく離れてしまっていることを意味している。ここでは、マンハイムの歴史主義の変質の過程、あるいは歴史主義からの離脱の過程について、立ち入った議論を行うことはさし控えねばならないが、SeinsgebundenheitからSeinsverbundenheitへの用語の変化は、このような基本的な立場の変化との関連において捉えられることによって、初めて十分に理解しうるものとなるであろう。

註

- ① Meja, V.; *The Sociology of Knowledge and the Critique of Ideology*. in *Cultural Hermeneutics* 3, 1975, p. 67.
- ② Simonds, A. P.; *Karl Mannheim's Sociology of Knowledge*. Oxford U. P., 1978, p. 27.
- ③ この論文は、1928年に学会において発表され、翌29年に雑誌に掲載されたものである。
- ④ Loader, C.; *The Intellectual Development of Karl Mannheim*. Cambridge U. P., 1985, pp. 112-113.
- ⑤ 「Seinsgebundenes Denken という用語によって、私はイデオロギー概念の純粹に学問的な内容を、特殊な政治的・扇動家的包装から解放しようとしている。」(I. u. U.; S. 71, 訳189頁)
- ⑥ 厳密には、ここでは Seinsgebundenheit ではなく soziale Gebundenheit について述べられているのであるが、文脈から判断して、両語が同じ内容のものであることは明らかである。
- ⑦ Kettler, D., Meja, V., Stehr, N.; *Karl Mannheim and Conservatism*. A. S. R. Vol. 49, 1984, p. 78.
- ⑧ Social determination は、本文中で、Seinsgebundenheit 及び Seinsverbundenheit に共通の訳語として用いられている。
- ⑨ 代表的なものとしては、Merton, R. K.; *Karl Mannheim and the Sociology of Knowledge*, in *Social Theory and Social Structure*. Free Press, 1957. 森東吾他訳、「カールマンハイムと知識社会学」『社会理論と社会構造』、みすず書房、1961年所収。またシモンズは、マートンに代表されるこれまでの解釈が、この関連を因果的決定論として捉えていることを批判し、それが解釈学的関連であるとする見解を示している。ローダーもケッター等も、基本的には、このシモンズの見解を受け容れている。なお、筆者の解釈としては、次のものを参照されたい。「マンハイム知識社会学における意志と認識」『現代社会学』10、講談社1978年所収、および、「歴史主義的知識社会学の視座」『大谷学報』62巻2号、1982年所収。
- ⑩ これ以後、二つの語を特に区別する必要がないと思われるときには、両語に共通の訳語として、存在拘束性という語を用いることにする。

なお、本文中に略語で、あるいは頁数のみを示したマンハイムのテキストは次の通りである。

Das Problem einer Soziologie des Wissens, in Wolff, K. H. (H. g.) *Wissenssoziologie*. Luchterhand, 1964. 樺俊雄訳、「知識の社会学の問題」『マンハイム全集2』潮出版社、1975年所収。

I. u. U.=*Ideologie und Utopie*. G. Schulte-Bulmke, 5. Aufl. 1969. 徳永恂訳, 「イデオロギーとユートピア」『世界の名著56 マンハイム オルテガ』中央公論社, 1971年所収。

Wis.=Wissenssoziologie, in Vierkandt, A. (H. g.) *Handwörterbuch der Soziologie*. Ferdinand Enke, 1931. 樺俊雄訳「知識社会学」『マンハイム全集2』所収。

Preliminary Approach to the Problem, in *Ideology and Utopia*. Routledge, 1936. 高橋徹訳, 「英語版序文」『世界の名著56マンハイム オルテガ』所収

Konservatismus. Suhrkamp, 1984.

(なお, 訳文は適宜変更してある。)

(本学専任講師 社会学)